

意思決定・評価スタイル尺度の作成と 行動や感情との関連性について

上市秀雄

筑波大学大学院システム情報工学研究科

全体の流れ

- 意思決定のプロセスについて
 - 意思決定のプロセス
 - 意思決定スタイルと内的要因の関連性の研究
 - 結果評価・対処スタイルの必要性
- 意思決定・評価スタイル尺度
 - 具体的な因子と項目
 - 意思決定スタイルの年齢差・性差について
- 今後の課題

意思決定のプロセス

ダイナミック・リスクテイキングモデル(上市(2003)を改変)



意思決定プロセスと結果評価・対処プロセスからなる

従来の意思決定スタイル研究の例



● Kogan (1965)

- 熟慮型 (reflective)
 - 行動: 反応は遅い。誤りは少ない
 - 内的要因: 失敗に対する恐れが大きい
- 衝動型 (impulsive)
 - 行動: 反応が早い。誤りが多い



● 上市・楠見 (2004) (ビニエット法)

- 分析型 (熟慮型)
 - 一時的利得状況 (スキー・株投資)
 - 「行動しない」を選択
- 直観型 (衝動型)
 - 長期的利得状況 (受験、恋愛)
 - 「行動する」を選択

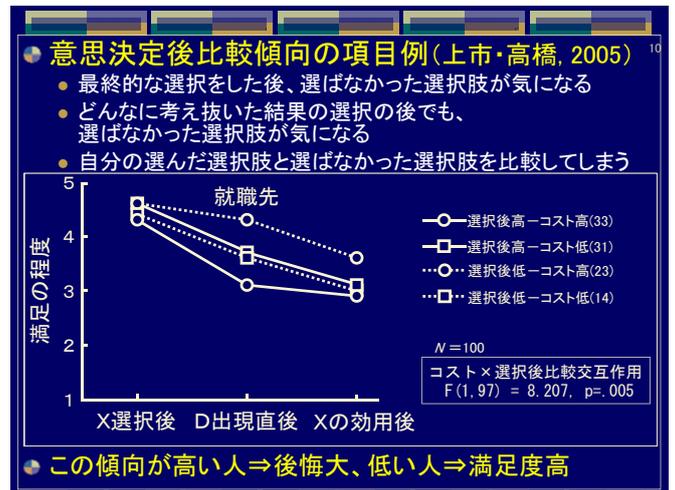
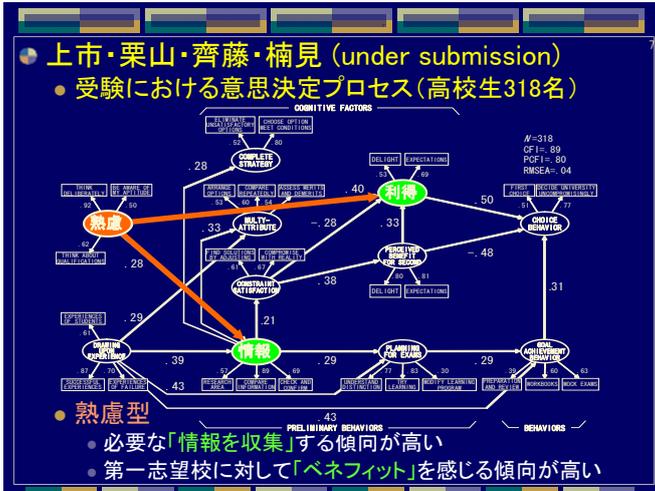
意思決定スタイルと行動の選択率 (%)
(大学生70名)

	直観型		分析型	
	行動	非行動	行動	非行動
受験	84.6	15.4	51.6	48.4
恋愛	78.1	21.9	52.6	47.4
転職	80.6	19.4	74.4	25.6
スキー	46.9	53.1	15.8	84.2
株投資	26.3	73.7	25.8	74.2
合計	62.8	37.2	44.6	55.4



● Janis & Mann (1977)

- 熟慮型 (vigilance)
 - 内的要因: 満遍なく情報収集し、十分検討する
 - よい決定
- 短慮型 (hyper-vigilance)
 - 内的要因: 十分な時間を使わず、最も不快感を与えない選択肢を性急に選ぶ
 - 悪い決定



意思決定・評価スタイル尺度作成の必要性

- よって、意思決定スタイルだけでなく、行動・結果の評価や、内的な状態を測定する尺度を作成する必要あり
- 楠見・上市(2008)
 - 意思決定スタイル、評価スタイル測定尺度を作成
 - 首都圏在住の市民1137名、最尤法、プロマックス回転、5段階評定

意思決定スタイル尺度の項目

- 物事を決める前の決め方を測定(12下位尺度)
 - 迷い(3項目)
 - 迷ってしまうと、どれか一つに決められなくなってしまう
 - 最大追求(7項目)
 - 常にベストのことを考える
 - 選択肢比較(4項目)
 - 何かを決めるときは、できる限り様々な選択肢を比較する
 - 責任(4項目)
 - 自分で決めたことなら、どんな結果であったとしても受け入れる
 - 先延ばし(3項目)
 - 今すぐやらなくても、そのうち何とかなるだろうと思う

13

- **多い情報による混乱 (4項目)**
 - 情報が多すぎると、どうしたらいいのかわからなくなる
- **衝動-熟慮 (6項目)**
 - そのときの思いつきで行動することがある
- **類推 (6項目)**
 - 他の人の事例を参考にする
- **後悔回避 (2項目)**
 - 絶対失敗はしたくないと思う
- **悲観 (3項目)**
 - どんなに考えても、運が悪ければ悪い結果が生じてしまうと思う
- **満足化 (3項目)**
 - そろそろ満足できるものであれば、それで十分である
- **バイアスのある情報収集 (3項目)**
 - 自分にとって必要な情報だけを集めてしまう

14

評価スタイル尺度の項目

- **物事を決めた後の考え方を測定 (7下位尺度)**
 - **選択肢比較による後悔 (4項目)**
 - 考え抜いた結果の選択の後でも、選ばなかった選択肢が気になる
 - **後悔のしやすさ (4項目)**
 - どんな結果であっても、後悔してしまう
 - **反実仮想による後悔 (4項目)**
 - 悪い結果が出た時「もっとよく考えれば失敗しなかったのに」と思う

15

- **結果の比較 (3項目)**
 - 決める前に想像した最高の結果と得られた結果を評価する
- **満足化 (5項目)**
 - そろそろ満足できる結果を得られたのであれば、それで十分である
- **評価懸念 (4項目)**
 - 得られた結果が、今後将来どのような評価になるかが気になる
- **最大追求 (3項目)**
 - どんな結果が出ても、自分なりの最高の基準と比べてしまう

16

意思決定スタイルの年齢差、性差

衝動-熟慮
思いつきで行動することがある

年齢とともに減少傾向

後悔回避
絶対に失敗したくない

年齢とともに若干減少するが60代は逆に増加傾向

17

先延ばし
そのうち何とかなる

年齢とともに減少傾向

責任
どんな結果も受け入れる

70%の人がこの傾向がある年齢とともに増加する傾向

18

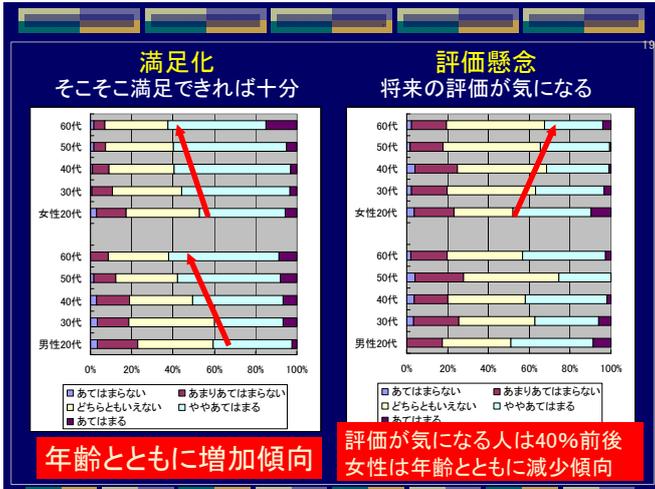
評価スタイルの年齢差、性差

選択肢比較による後悔
選ばなかった選択肢が気になる

年齢とともに減少傾向

後悔のしやすさ
どんな結果でも後悔してしまう

90%以上がこの傾向がない年齢による違いもない



- 20
- ## 今後の課題
- 様々な意思決定場面において、各個人の内的要因、行動、結果評価・対処と意思決定スタイル、評価スタイルとの関連性
 - 具体的に、どのスタイルがどの要因あるいはどの評価・対処と関連するかを明らかにする必要
 - 例：熟慮意思決定スタイルは、罪悪感、後悔、恥が生じる状況において、ネガティブ感情対処(合理化)と関連する (Ueichi, under submission)
 - 信頼性、妥当性の検証
 - 他の尺度との関連性の検討
 - Five Factor Model、後悔尺度、その他パーソナリティ

21

参考文献

- Janis, I., & Mann, L. (1977). Decision making: A psychological analysis of conflict, choice and commitment. New York: The Free Press.
- Gilovich, T., Medvec, V. H., & Kahneman, D. (1998). Varieties of regret: A debate and partial resolution. *Psychological Review*, 105, 602-605.
- Kagan, J. (1965). Impulsive and reflective children: Significance of conceptual tempo. In J. Krumboltz (Ed.), *Learning and the educational process*. Chicago: Rand McNally. Pp.133-161.
- 楠見孝・栗山直子・齊藤貴浩・上市秀雄(2008). 進路意思決定における認知・感情過程：高校から大学への追調査に基づく検討。ヤリア教育研究, 26(1), 3-17.
- Radford, M.・中根允文(1991). 意志決定行為：比較文化的考察。ヒューマンティワイ。
- Schwartz, B. (2004). *The paradox of choice*. Ecco Press. 猶穂のりこ訳 なぜ選ぶたびに後悔するのか―「選択の自由」の落とし穴ランダムハウス講談社
- 上市秀雄・楠見孝(2004). 後悔の時間的変化と対処方法：意思決定スタイルと行動選択の関連性。心理学研究, 74(6), 487-495.
- 上市秀雄 (2003). 個人的リスク志向・回避行動の個人差を規定する要因の分析。風間書房
- 上市秀雄・楠見孝 (2004). 後悔の時間的変化と対処方法：意思決定スタイルと行動選択との関連性。心理学研究, 74(6), 487-495.
- 上市秀雄・楠見孝 (2006). 環境ホルモンのリスク認知と回避行動。認知科学, 13, 32-46.